研究班報告４ Global Studies Working Group

蕭延中「晩年毛沢東の全体的解読についての試論」その他

近藤邦康

2003年度に「グローバル・スタディーズ」班で行われた、拙著『毛沢東　実践と思想』(岩波書店、2003年７月）の合評会と、「ＩＩＣＰＳ　ニューズ・レター」No. 13に掲載された内田健二班員の書評をふまえて、2004年に日中学術交流を通じて知った中国の毛沢東研究の動向を紹介し論評して、班活動の報告に代えさせていただきたい。

はじめに

私は2004年８月～９月の１カ月間中国で研究と資料収集を行った（『大東法学』第14巻第２号参照)。その際蕭延中氏から恵贈された論文「晩年毛沢東の全体的解読についての試論」を中心に、氏の毛沢東研究を紹介し論評したい。

蕭延中氏は1955年北京市生まれ、文化大革命後1978年中国人民大学に入学、現在同大学国際関係学院政治学系副主任・副教授、毛沢東を中心に中国近現代政治思想史と中国文化伝統を研究。私は1988年９月６日以来、17年間９回の中国訪問の際ほとんど毎回氏と討論した。

この「試論」([2003]) は、1949年から1976年に至る建設期の毛沢東の思想の展開の大筋を、簡明な図表にまとめて説明を加えている。非常に重要であり、深く考えさせられる。以下、図表の全訳をかかげ、一で説明の要点を記し、二で論評する。

歴史情況		中国近代社会に形成された強烈な抑圧感が、民族全体の自強・自立の意志を激発した。民族の自己実現の緊迫性が、今日の「中国精神」に内在する魂となった。								
形式	事物分類	1949	1952	1956	1958	1959	1964	1966	層位類別	潜在主題
表層	政治事件	中国定礎	土地改革	整風反右	大躍進	廬山会議	四清整党	文化革命	経験層位	腐敗抑制
中層	思想構造	正統性	主体定礎	政治制限	経済突破	上層論争	新階級	主体再現	論理層位	主体地位
深層	心理動機	成功自信	初歩実現	再度実現	高度衝動	心理警戒	危機意識	最後冒険	潜在意識	自己実現
欠落分析		ひんぱんな人事の変動により、正統性の危機（権力の危機ではない）を防止し処理したが、国家の層位の憲政建設と 制度創造は、理論上も実践上も明らかに空白であった。								

—

歴史情況

毛沢東の晩年の思想と行動は、民族を救おうとし平等を求める強烈な意志と、民族全体が自分で自分を苦しめるという実際の結果とが、ねじれてからみあっていた。

毛沢東と「毛沢東現象」(毛沢東の思想が、毛個人の枠を超えて、人人がともに認める中心価値となり、各個人と一体化して、民族の自己実現と自己沈下を表現するようになった社会文化現象)を、長い歴史情況のなかに置いて、伝統文化遺産と社会心理が民族の道徳準則、思惟方式、感情・理知を鋳造する作用を考察する必要がある。社会心理は必ず集団の記憶と歴史情況に制約されるのであり、主観意志の思うままにはならない。

1840年アヘン戦争以来、西洋資本主義の生産力に中華帝国の夢を打破されて中国は敗北し続け、特に８年間の抗日戦争は「中国人の魂の深部に、取りつくろうことのできない苦痛と傷を焼きつけた」。長期の屈辱と抑圧により沈殿した憤激が、「中華民族の現代精神のなかの潜在的気質に内面化され」、中国人が毛沢東をカリスマとした個人崇拝現象や、抗米援朝、知識人思想改造、大躍進、文化大革命等の政治事件の基底にある。

政治事件

(文化大革命以上に) 大躍進こそ、晩年毛沢東を研究するカギであり、これを境として前後二段階に分れる。前の段階は新政権の正統性を確立する外向型の時期であり、後の段階は政権の正統性が動揺して、毛沢東が共産党内部の衝突や党と社会との関係を中心問題とした内向型の時期であった。

毛沢東は、建国初期の政治意識統一の後、㈠農業集団化により生まれた党内不一致を解決するため整風運動を起こし、1957年党外知識人に党を批判させたが、共産党政権の正統性が挑戦を受けた。㈡反右派闘争で知識人を抑圧した後に大躍進を開始し、廬山会議で (毛沢東と彭徳懐の) 党内対立が起こり、中ソ論争が始まり、修正主義を政治問題とした。㈢1962年党上層の力を動員して党基層幹部に対して「四清」運動 (幹部の汚職、浪費、官僚主義の克服をめざす社会主義教育運動) を行い、「新しい階級」概念を提起した。㈣1966年人民を発動して「党内の資本主義の道を歩む実権派」＝党高級指導層に対して文化大革命を行った。中国共産党は国家統治の「政策——行政」問題を「整党整風」問題に変え、毛沢東はそれを階級闘争、継続革命と規定したのである。

思想構造

晩年毛沢東は、人民を党よりも優越させる、倫理的色彩の濃厚な人民主義 (populism) 的政治理論を形成した。革命期には、人民は帝国主義・封建主義・官僚資本主義に圧迫され統治されて「奴隷」の地位にあるが、政治的実力が弱く理論水準が低いので、共産党が「媒介」の役割を果たすことによって、圧迫者を打倒して「主人」となることができる、と考えてそれを実行した。建国後、人民主権の真の意味を模索した毛は、社会主義社会で「主人」となった人民が、党閥官僚階層が「主人の主人」となったことにより、再び「奴隷」となったので、毛沢東自身が「媒介」の役割を果たすことによって、「主人の主人」を打倒して「主人」となることができる、と考えて文化大革命を起こした。

心理動機

毛沢東の心理において、極度の自尊・豪放 (虎気) と過敏な程の細心・慎重 (猿気) が並存し衝突した。毛は、人民、大衆、プロレタリア階級を貧民、賤民、下等人、小人物、蔑視される者、被圧迫者と見なし、自分という大人物が小人物を助けて、彼らを圧迫する大人物に反対する、という態度を取った。被抑圧者は生命の動力を持ち、現状を革新するが、抑圧者は惰性の要素を生み、歴史の前進を阻止する、圧迫が深いほど反抗が激しくなる、と見て、人民を抑圧から解き放

ち、党官僚が生み出す惰性を突破しようとした。

この政治事件、思想構造、心理動機の三層が有機的に関連し、相互に作用して、晩年毛沢東の思想絵巻を構成した。

欠落閲読法

アルチュセールの「症候（symptomatic）閲読法」を「欠落閲読法」と翻訳して、思想家の視野から欠落する個所を分析することにより、この思想体系の本質を把握する。人民が国家の主人となれば、自ら法律を制定し、政府を選挙し、国家を管理することができ、共産党は「媒介」の歴史的使命を成し遂げて新しい役割を担うべきである。しかし、毛沢東には、国家の根本的政治制度を構築する創造的動力が欠けていた。政治関係の調整は行政人事の変動を主な手段とし、憲政体制の指導と制約を空白状態にした。「全体の平等」と「個体の自由」の内在的調和関係こそ、現在の中国を困惑させる主要な政治哲学的命題である。歴史の天秤の一方に、偉大な政治家・思想家が十分自己を実現した個人的価値が乗り、他方に、数千年の大国の政治制度構築の全体的欠落が乗っている。双方の矛盾と緊張こそ、わが民族に残された社会記憶と思考空間である。

二

蕭延中氏の毛沢東研究について、私は第一に、氏の毛沢東と文化大革命に対する姿勢に注目する。

蕭氏は、毛沢東において民族「大我」と個体「小我」が時に矛盾し時に融合して一体となる（李大釗の「宇宙即我、我即宇宙」の思想を継承して「人民即我、我即人民」の思想を形成したと見るべきであろう）と見て、毛を「時代精神と民族精神の人格的化身」と考える。そして、毛が社会の権威の象徴となったために、「民族全体が自我を喪失し」、人人が毛に自己を捧げ犠牲にしたことを正視する。それ故、氏は、「偉人がわれわれに偉大に見えるのは、ただわれわれが低くひざまずいているからだ。われわれは立ち上がろう」（マルクス-エンゲルス『神聖家族』第６章に引用された1789年の週刊誌『パリの革命』の標語）を引用して、自分が立ち上がることによって、毛の時代を超越した理想と、超越がもたらす抑圧・困惑の両面を直視することができると言い、「歴史は毛沢東に他人が取って代わることのできない輝かしい地位を残すであろう」（[1988] 引言8頁）と前途を見通す。氏はまた、われわれの世代は何度も地に倒れたが、「地獄の鉄鎖」を耐え抜くことができた、「われわれはまた手をついて立ち上がった、しかも永遠にいつまでも立っている」（同上219頁）と言う。文化大革命の苦難の体験を、文化大革命を止揚する研究活動の動力に転換することを志したのであろう。毛沢東が「個人専断の権力によって人民の広範な民主を実現」（同上193頁）しようとしたと見るからこそ、蕭氏はそれに代わる国家の憲政体制の確立によって人民民主を実現する道を模索していると思われる。

蕭延中氏がこのような姿勢を取って、これまで毛沢東の青年期の思想と文化大革命の思想との関連の研究に主力を注いだことは、理解することができる。氏はこの「試論」により、一歩進んで研究範囲を建設期全体に拡大した。今後氏が革命期をも含めて毛沢東の思想全体を研究するよう期待する。それ故、私は第二に、現在感じている疑問を提出し、注文をつける。

㈠蕭氏が建国後の政治事件の基底にあるものを、過去の外国の侵略から受けた屈辱に対する中国民族の憤激と見たことは鋭いが、毛沢東がそれを現在の外国の侵略に対する準備と結びつけていたことに注目すべきではないか。中国が帝国主義が起こす世界戦争に備えて、自国の人民戦争態勢を堅持し、朝鮮、ベトナムをはじめアジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動を支援したことを重視すべきであろう。

㈡民族「大我」と個体「小我」の結合について、日本帝国主義の侵略に対する中国民族の抵抗の原動力を、究極的には民衆一人一人の自覚的能動性（主観能動性）の発揮に求めた、毛沢東「持久戦論」の思想を重視すべきではないか。建国後毛がこの革命思想をどこまで貫いたか、それと新たな国家思想とをどのように結合したか、を解明する必要があろう。

㈢建国後の中国の政治制度について、臨時憲法に当たる「人民政治協商会議共同綱領」と人民

民主独裁論、および、その基礎にあるソ連の国家社会主義や、毛沢東の統一戦線思想と根拠地思想を、解明すべきではないか。「なかったもの」の指摘は正当だが、それを「あったもの」の分析と結びつける必要があろう。

蕭延中主要業績目録（[　　] は著書名、論文名の略称）

『巨人的誕生 ——“毛沢東現象”的意識起源及中国近代政治文化的発展』国際文化出版公司、1988年12月（[1988]）。

編著『晩年毛沢東』春秋出版社、1989年１月。

「関于毛沢東晩年政治倫理観的若干理解」中共中央文献研究室・中央档案館『党的文献』 編集部編『毛沢東重要著作和思想形成始末』人民出版社、1993年12月。

興梠一郎訳「中華文明のアポリア⑩ 「毛沢東熱」にみる現代中国人の心理構造」『世界』 岩波書店、1997年４月。

編著『外国学者評毛沢東』第１巻～第４巻、中国工人出版社、1997年６月。

「“中国現代化視野中的毛沢東及其思想地位”課題論証報告」2000年１月。

「試論関于晩年毛沢東的整体解読」『毛沢東・鄧小平理論研究』2003年第６期（[2003]）。

「20世紀90年代以来西方関于毛沢東及其思想研究的趨向」『中国人民大学学報』2003年第６期。

中国伝統文化中崇「聖」現象的政治符号学分析：一項関於起源与結構的邏輯解釈」『政治学報』2004年６月。

「中国思想研究的独特視角 ——従《知識与文化》看“中国思想”研究之方法論問題」

「社会史研究中三個可能被“誤読”的等号」